来日11年の歩みに伴い
日本に馴染んだ心の変化関連動画
公開中!

劉 健全†

キーワード：信頼社会、驚き事、言語の壁、文化の違い、企業研究、市民活動

まえがき

本学会誌への寄稿をきっかけとして私が来日11年の歩みを振り返ることができました。本稿では、過去の歩みに沿って私が直面していた日本社会に馴染み込むために、いつの間に起きた心の変化を考えつつ、日本と母国の違いに軽く触れていきます。最後に、今後向けの励みになる個人的なメッセージを読者の皆様と共有します*。

自己紹介・略歴

私は、2005年に中国の汕頭大学を卒業した後に、ソフトウェアエンジニアとして深圳市に本社を置く大手IT企業（Tencent Inc.）に入社しました。1年後、2006年9月に大学院への進学を目的に来日しました。筑波大学にてコンピュータ・サイエンスを専攻し、データベース・情報検索に関わる研究に従事していました。同分野において修士と博士の学位を取得し、2012年4月に日本電気に入社して中央研究所に配属されました。現在、大規模な映像検索を中心とした研究テーマに取り組んでいます。

来日の初日：別れの涙と驚き満載

2006年9月3日は、私にとって一生に忘れられない記念日の一つです。人生初の飛行機かつ国際便に搭乗して中国を離れ友人・家族と別れた日です。出発ロビーで最終案内を待っている間に、日本への留学とその近い将来を憧憬しながら、見送りに来てくださった友人と家族の皆様と談笑していました。やはり人生の初出国ですので、未来への不安を当然抱え

ていました。そろそろ出発しようと思った瞬間、別れの涙は結局我慢できずワーッと溢れてきました。今その瞬間を思い出しても当時の涙がまだ出そうにあります。

実家にいる親父に電話をかけ、「もう飛行機に乗っていくよ、お元気で」と伝えたら、電話の向こう側から親がしくし

図1 国際ターミナル出発ロビーで友人・家族との別れ

* 本稿で言及した観点は、あくまで本人の所見・所感ですので、母国や日本を代表する、他人を左右する観点ではありません。

† NEC システムプラットフォーム研究所
"Changes in the Mind with the Past 11 Years in Japan" by Jianquan Liu
(System Platform Research Laboratories, NEC Corporation, Tokyo)

くと泣くように聞こえてきました。自分は思い切り電話を切って見送りの友人・家族に手を振って出国手続きゾーンに向かって行きました。きっとあの時は別れの悲しみが心の中に沈んでいたと思います。飛行は約5時間が経過し私にとってすべて新しい島の国に飛行機が着陸しました。そして私は、この島でたくさんの驚きを拾い始めました。

一つ目の驚きは、この島の人たちが国境なき困った人を熱心に助け合い、人への信頼は社会の基であると感じていました。当時、私は荷物をピックアップした後に到着ロビーを出てつくばセンター行き的高速バスのりばへ向かって行きました。最終便の発車時刻にギリギリ間に合いましたが、私が当然のように乗車時にチケットを買えば良いと思いました。運転手さんに英語でバスの行き先と運賃を尋ねて正しいのがわかったため、1万札を運転手さんに渡そうとしていました。しかしながら、運転手さんが困ったような表情で何かを言ってきましたが、当時日本語がほとんどわからない私は何も聞き取れていませんでした。その瞬間、運転手さんが思わずに1万札を受け取って何かを言ってからバスを降りて姿が目の前に消えていました。当時、あの1万円は私にとってとても大きな金額だったため、自分は当然心配してバスを降りて周囲であちこちを見回っていました。しばらくすると、運転手さんの姿が再び現れ、私にチケットと残金の千円札と硬貨を渡されました。そのときは、自分の顔がパッと熱くなり赤くなっていました。運転手さんが去っていた謎は解けて、すぐに「ありがとうございます！」を連発して謝意を表しました。今再度思えばとても恥ずかしかったのでしょう。

ごく簡単なことだったのですが、そのタイミングで運転手さんの思いやりは何度思い出してもやはり不思議のように感じています。なぜならば、その1万円札を持たれたまま姿が消えていたことは、他の国では考えにくいことだと思っているからです。これは私にとって日本社会の初印象でした。実は、それからこの経験に影響を受けて、私がこの社会に馴染みこむための考え方が一変しました。母国の文化で育てられた意識では、何事も他人を安易に信じることにしないような考え方が中心でした。日本では、何事もまずは他人を信じてあげるという考え方が基本なのではないかと思い始め、交友に際してこの簡単なプリンシプルを持って考え方を変えています。このプリンシプルが効いている裏には、この社会は人間の信頼関係に基づいて築いてきたのではないかと、私はそう考えています。

つくばセンターに向かって動き始めた高速バスに乗っていた私は、窓の外を静かに眺めながらその次の驚きを見つけようとしていました。その次、目に映ったのは、国道の道路沿いに立てる広告の看板が非常に多いことです。しかしながら、道路の両側を遠く眺めると田んぼと緑はいっぱいあるように感じていました。「え？ここは先進国の日本か？中国の農村部とあまり変わらないのでは？」と正直に当時は

そう思ってしまいました。一方で、さまざまな広告看板より映り出される日本のサービス業や商業の発達度に不思議に興味を持つようになりました。日本に来る前に想像していた先進国のイメージと違ってギャップが生じていましたが、もちろん後々の生活体験により心にある疑惑が徐々に解けました。経済力を向上するのに手一杯な発展途上国に比べ、日本は緑のまちづくりを綺麗な持続再生環境の根本にしている方針であろうか、自分はそう考えています。

外を眺めながらあっという間に高速バスはつくばセンターに着き、バスを降りた瞬間、つくばの空気を吸ってほっとした心はとても快適でした。しかし、つくばセンターは終点ではないため、筑波大学構内の留学センターまでさらに路線バスに乗り換える必要でした。事前に調べた構内循環バスに乗り、バスは徐々に大学のキャンパスへ向かって発車しました。当時私が大きなペンギンぬいぐるみを抱いて乗車したため、車内に多くの大学生の皆さんに注目されていました。この時、男性である私にとって恥ずかしく感じていたため、日本語のみでの降車案内はほぼ聞き取れず急に運転手さんに英語で目的地を尋ねてみました。だが、通じなかったため、自分の席に戻りました。バスの走行に伴い心が不安に感じ始めて、突然、バスが停まり、前の席に座っていた女子大生が降りると同時に、私に「次！次！ネクスト！ネクスト！」と言って指でドアを指していました。

その瞬間、私が驚いているのは当然であり、答えの反応もまだできず女子大生はすでに降車してバスが次のバス停に向かって再び発車しました。その直後、どこからの本能反応かがわかりませんが、次は自分の降車バス停だと認識し、降車ボタンを押して無事にバスから降りることができました。心の驚きはまだ消えていない中で、果たして降車バス停が正しかったのです。地図案内を確認しながら、最終的に1人で留学生センターの玄関まで無事に辿り着くことができました(図2)。

図2 筑波大学留学生センターの玄関前に辿り着いた瞬間

今、11年前に来日の初日を何度振り返っても本当にグダグダだったようにしか思いません。同伴者なしかつ日本語がほぼ分からず英語も通じない状況で大学のキャンパスまで安全に到着したことは、日本で開こうとする新しい世界への第一歩に恵まれた幸運かもしれません。そしてこの恵みと得られた驚きを温存して次の歩みを踏み出す力に変えたいと考えていました。

大学院の日々：言語の壁を破り博士号を目指す

大学に到着して生活と環境に慣れて落ち着いた後に、研究生として在籍しながら大学院入試向けの準備を早々に開始しました。多くの来日留学生と異なり、私は日本語学校に通うことがなく、直接に大学院入試を準備することになりました。本来であれば、私は試験対策の準備と本番試験・面接を英語で行うべきだったのですが、来日初日に日本語のわからない体験があったため、入試向けの準備期間を日本語の勉強にも活用するように日本語で行うことを決意しました。地味な努力を積み重ねることで、約3ヵ月の準備期間を終え、基本的な日常会話ができたとともに、大学院入試の筆記試験も口頭試験も日本語で行い奇跡的に合格しました。2007年4月に大学院博士前期課程へ進学することが決まりました。

実は、私が試験準備の3ヵ月に体系的に日本語を勉強する時間は少なく、ほとんど地味にあらゆるチャンスを掴んで専門教科書や新聞紙、テレビ、生活中的雑談、交流イベント等の場面を有効活用して、多くの日本語を吸収してきました。話せないから話せる、聞き取れないから聞き取れる、書けないから書けるようになって、日々に少しずつ語彙数を増やしてきました。

例えば、コンピュータ・サイエンス専攻入試指定科目の日本語教科書を用いて内容全体を1回読み通し、中国語・英語で習得した専門用語を日本語と対応付けるように工夫していました。毎日決めた時間帯に図書館に行って、新聞紙を手に入れ記事を読むことで最新の話題を紹介する縦書き日本語を読み慣れるように続けていました。また、食事を取る時間帯にテレビを観て耳を日本語の聞き取りに慣れるように継続していました。さらに、日常生活ではできるだけ多くの日本人学生と雑談して、日中交流イベントに積極的に参加することにより、話す機会を増やして間違っただとしても喋ってみるよう心掛けていました。私は、このように地味なやり方で大学院の5年間にわたって、周囲の環境から日本語を吸収し続けていました。また、日本人の発音と言葉の扱い方を真似してネイティブに近い日本語力を身につけるように注意を払っていました。

これだけでは、専門分野における勉強や研究に関わるさまざまな場面で使う日本語はまだまだ足りないと感じていたため、さらに補充する必要があると考えていました。大学院の5年間では、自己目標として多くの日本語文献を

図3 博士論文審査の公聴会と学位記授与式の様子

調査して、研究室のゼミや国内学会での研究発表は必ず日本語で口頭発表をチャレンジするように決め付けていました。果たして修練の効果を検証する正念場を迎えた博士論文審査の公聴会では、英語で作成した百数十枚の発表スライドに対して、あえて日本語で口頭発表を行いました。確かにハイリスク・ハイリターンな試みだったのですが、万全な準備を整えていたため、本番を無事に終えて博士号を確実に取得することができました(図3)。これで言語の壁を破ったと決して言えませんが、今現在でもその目標を達成するまで挑戦を続けています。

実際に言語の壁を思えば、中国語・英語に比べ、日本語の裏にある文化と言語の曖昧さに支配されるのではないかと私はそう考えています。実は、来日初期の頃にごく簡単な言葉で困ったことがあります。例えば、私は中国のお茶を入れようとする時に、隣席に座っていたチューターの方に「お茶を飲みませんか」と尋ねると、「いいです」という答えを返された経験があります。自分が何も違和感を持たずお茶を入れてチューターにあげようとした際に、初めてこの「いいです」は不要であることを知りました。似たようなことは少なくないでしょう。根本的なところを考えると、このような日本語の使い方になった理由としては恐らく日本人が「NO」を言わない言いたくないという曖昧さの根性にあるかと思います。私たち外国人にとって、

むしろこの根性を知って郷に入れば郷に従えをすれば、本当の壁を破れるかもしれません。

一方で、言語の壁は大学院の学業においてすべての困難ではありません。言語はコミュニケーションの道具にすぎないと思います。博士号取得までに研究する中で、常に感じていた孤独に耐えることが、実は最も困難なことです。今振り返って大学院の長い5年間に、私の心境は孤独を吹き払うために研究と勉学を楽しむところにあります。楽しく研究提案をし、楽しく実験を行い、楽しく論文を書き、楽しく学会で発表し、楽しく旅をするように良い循環を回していました。

企業の研究者：社員・市民・父として

そして博士号を取得した後、私は2012年4月に日本電気株式会社に入社し、中央研究所に配属され、データベース技術を活かした大規模な映像検索に関わる研究業務に従事しています。入社して5年強の時間を遡って考えれば、今現在の居る職場はおそらく自分にとって最適な研究環境に近いと思っています。なぜならば、この数年間では、自分が存分に思うように研究成果をあげ、自ら開発した技術が製品化され、事業に貢献しつつある中で、その技術・製品は社会へのインパクトが徐々に見えてくるように感じているからです。そして、自分自身が社員として産業界にいらながらも研究者としてアカデミアにおいて広範囲に学会活動をしています。また、川崎市民として地方行政への参画を始め、地域の市民活動の企画にも積極的に関わっています。さらに、4歳児を持つ父として日々のイクメン生活を楽しんでいます。個人的な見解としては、NECを巨人に比喻すれば、この巨人の支えがあるからこそ、私は現在巨人の肩に立ってさまざまな活動と本業のお仕事を両立できていると考えています。

まずは、一社員および企業の研究者として今より過去を振り返りたいです。2012年に入社直後の当時は、大規模な映像監視環境において犯罪捜査に役立つ映像検索の研究プロジェクトに関わり始めました。僅かの1年間で実証実験向けの実システムを開発完成しましたが、投入のタイミングは市場の需要より先に走ったため、思わずにプロジェクトが凍結に至り失敗な結果となりました。失敗から学んだ教訓は、大学で行う研究と異なり、良い成果があれば先に出せば良いのではなく、市場の需要にあった一番良いタイミングでその成果を出さなければ社会への価値はないという企業研究の残酷さです。その後、技術の改善を行いながら市場の需要に合わせて、新たなコンセプトを2015年に市場へ送り出すことに成功しました。このコンセプトは、公的施設や人の多く集まる場所で撮影した防犯映像データから、「頻繁に現れる人物」、「長時間滞在している人物」などを高速に見つけ出す新技術「時空間データ横断プロファイリング」(図4)と名付けています。この技術に関する研究成果はすでにCVPR 2016(デモ)、SIGGRAPH 2016(ポスタ)、ACMMM 2016にて発表し、高い注目を集めています。

そして産業界にいる私は、同時にアカデミアで研究活動も積極的に行っています。例えば、2015年から法政大学大学院理工学研究科の非常勤講師として週に一度、「知識獲得特論」の講義を担当しています。このほか、IEEEが主催する国際会議ICSC 2018, ISM 2017, ICSC 2017, BigMM 2016のプログラム共同委員長を務め、電子情報通信学会においてデータ工学研究会、およびシステム数理と応用研究会の各専門委員、情報処理学会論文誌編集委員に就任しているなど、広範囲に活動しています。

次に川崎に在住する外国人市民として、「川崎市外国人市民代表者会議」の第10期代表者に選出され、川崎市の地方行政へ定期的に参画していました。川崎市外国人市民代

図4 時空間データ横断プロファイリングのデモ画面

図5 国際会議IEEE BigMM 2016の開会式での記念撮影

図6 川崎市外国人市民代表者会議第10代表者の集合写真

表者会議は、川崎市が外国人市民とともに生きる地域社会づくりのパートナーと位置づけ、1996年12月に外国人市民の市政参加の仕組みとして設置された日本全国に唯一の公務組織です。代表者会議は、公募で選考された26人以内の代表者で構成され、任期2年制で自主的に審議を運営し、毎年の審議結果をまとめて川崎市長に報告します。市長は代表者会議からの提言を尊重し、行政施策に反映するように取組めます。私は第10期の代表者として任期2年の職務を遂行したことで、川崎市政への参加を通じて、このような独特な市民社会ならではの実現可能な仕組みの存在を身近

に感じています。

また、政府の公的な組織と平行して、4歳児を持つ父として私は、市民自主学級「川崎パパ塾」の企画委員を務め、イクメンパパの地域ネットワークを築くために地域活動にも熱心に取り組んでいます。

今現在の心境：今後向けのメッセージ

この11年が経った今、私は、不安を抱えながら近い将来にある夢を持って来日した未熟な若者から、幅広く社会活動に関わりさまざまな社会責任を担っている複数の身分を持つ1人の企業研究者、大学の非常勤教員、地方特別職付き公務員、川崎市民、そして父になっています。今現在の心境を言えば、過去に一步步成長してきた自分は、自分と同様に未来へ向かっていく人々に勇気をつけてさらに伸びて行けるように願っている心にあります。この11年を振り返ってわかったのは、心が思え至るところには、きっと自分が活躍できる広い舞台があること（中国語の諺：「心有多大，舞台就有多大」）を信じています。（2017年8月7日受付）

劉 健全 中国広東省出身。2006年、来日。2012年、筑波大学システム情報学研究科博士課程修了。同年、NEC(株)入社。現在、NECシステムプラットフォーム研究所主任。2015年より、法政大学大学院理工学研究科兼任講師。ICSC 2018、ISM 2017、ICSC 2016、BigMM 2016各プログラム共同委員長。博士(工学)。